

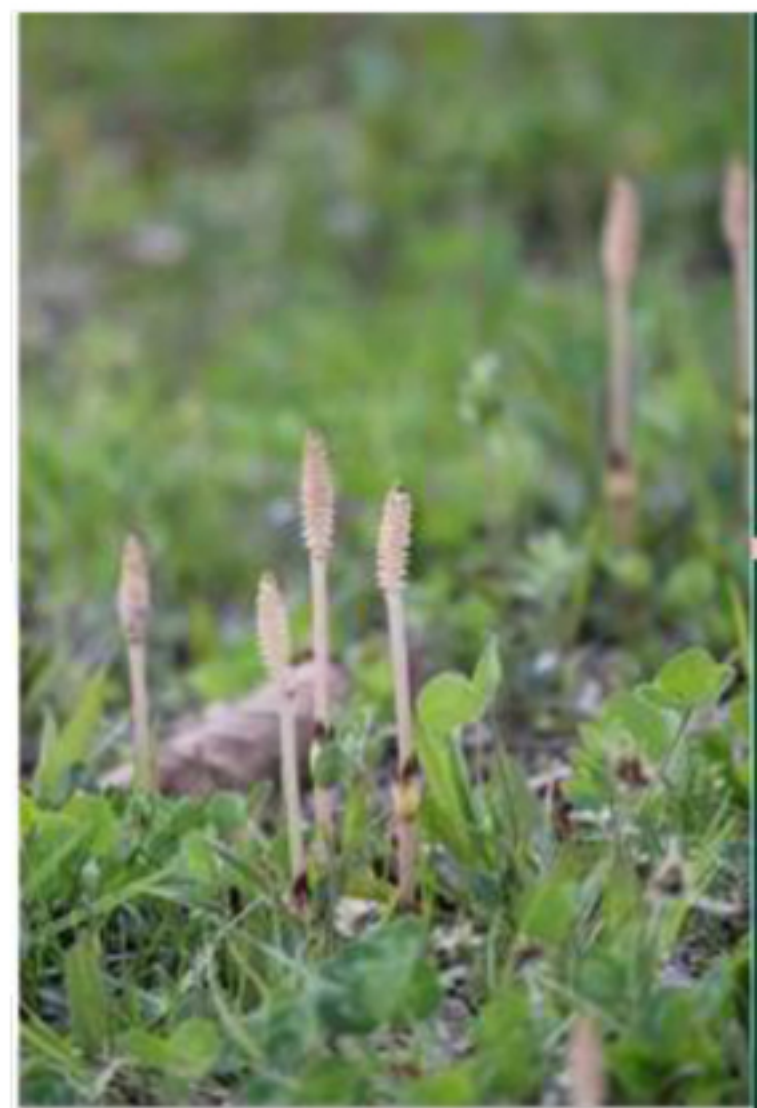
a. ネコヤナギ *Salix gracilistyla* (早春)

多摩丘陵の春はヤナギの芽吹きとともにやってきます。特にネコヤナギの花芽は可愛らしく、猫の名にふさわしい姿です。やがて足元にフキノトウが顔を出すと、ネコヤナギも花盛りを迎えます。花びらの無い控えめな花ですが、ミツバチやハナアブがひっきりなしに蜜を舐めに飛んでくる様子はとても賑やかです。



b. スギナ *Equisetum arvense* (早春)

皆さんはスギナのつくしんぼを摘んだり、節のところでちぎって戻したものを「どことった?」と当てっこしたりした経験があるでしょうか。足元の草花は、子どもたちにとって、ある時はおやつとなり、またある時は恰好の遊び道具となって、季節ごとに愉しみをもたらしたものです。道草を食わずに真っ直ぐ家へ帰る時代が来ようとは、いったい誰が想像したでしょう。



c. ウメ *Prunus mume* (早春)

およそ 300 を超える品種が作られ、日本で最も親しまれてきた花木の一つです。梅干しや梅酒を作るための果実生産はもちろんのこと、香り良き花も一足早い春を告げる風物詩として欠かせない存在となっています。普通、お花見といえばサクラを指すことが一般的ですが、それは江戸時代以降のこと。奈良時代以前のお花見はウメの花を楽しむ行事であったと言います。



d. スギ *Cryptomeria japonica* (早春)

日本特産種として知られるスギ。人々の暮らしとの関わりの歴史は縄文時代にまでさかのぼります。日本で最も多く植えられた木として知られ、今でも全国で杉林を見ることができます。材としての利用はもちろんですが、真っ直ぐ上に伸びたその樹形を生かし、何かの目印や境界として植えられるなどシンボリックな利用のされ方もあったようです。今は人が住まなくなり静まり返った集落ですが、ウメノキゴケの着生したウメの老樹や、軒先に植えられたスギの木に、かつての暮らしの気配を感じるのは私だけでしょうか。

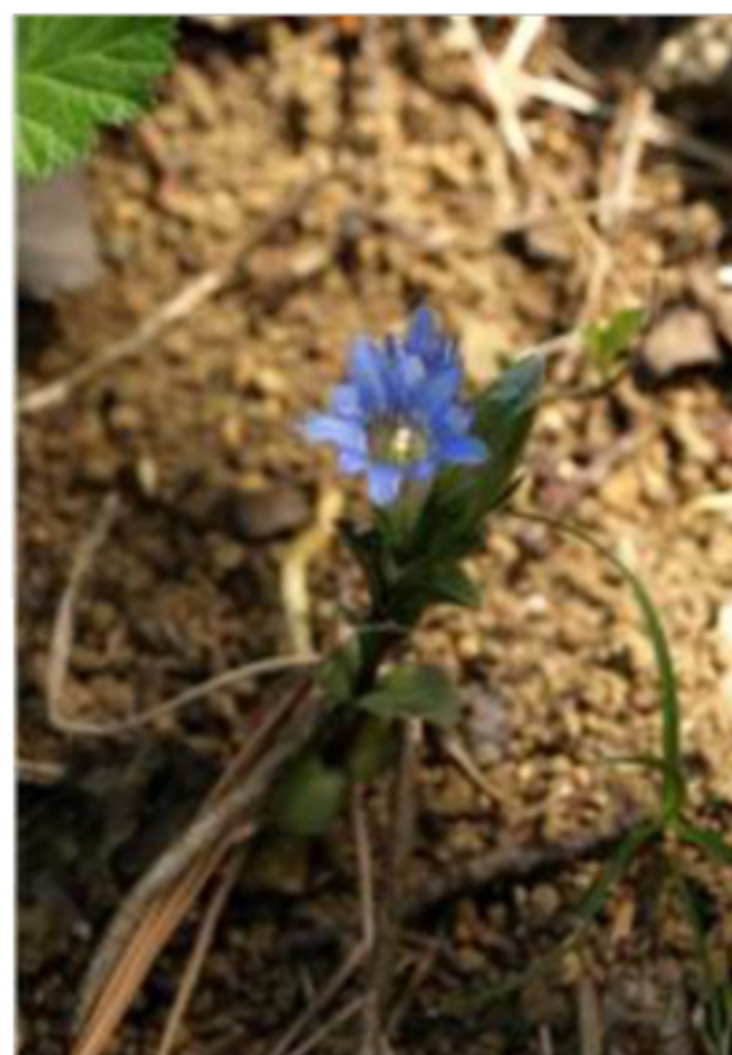
e. ウマノアシガタ *Ranunculus japonicus* (春)

別名をキンポウゲ。陽当たりが良く、やや湿った林の縁などに生える有毒植物です。多摩丘陵では見る機会の少ない種類ですが、谷戸の周りなどに細々と生き残っています。なお、この絵に描かれている植物は、どれも春の草地を彩る代表的な草花で、本種以外にはシロツメクサ、ホトケノザ、オオバコ、そして湿った場所を好むニリンソウ、ノミノフスマ、ケナシチガヤなどが混じり合って咲いています。



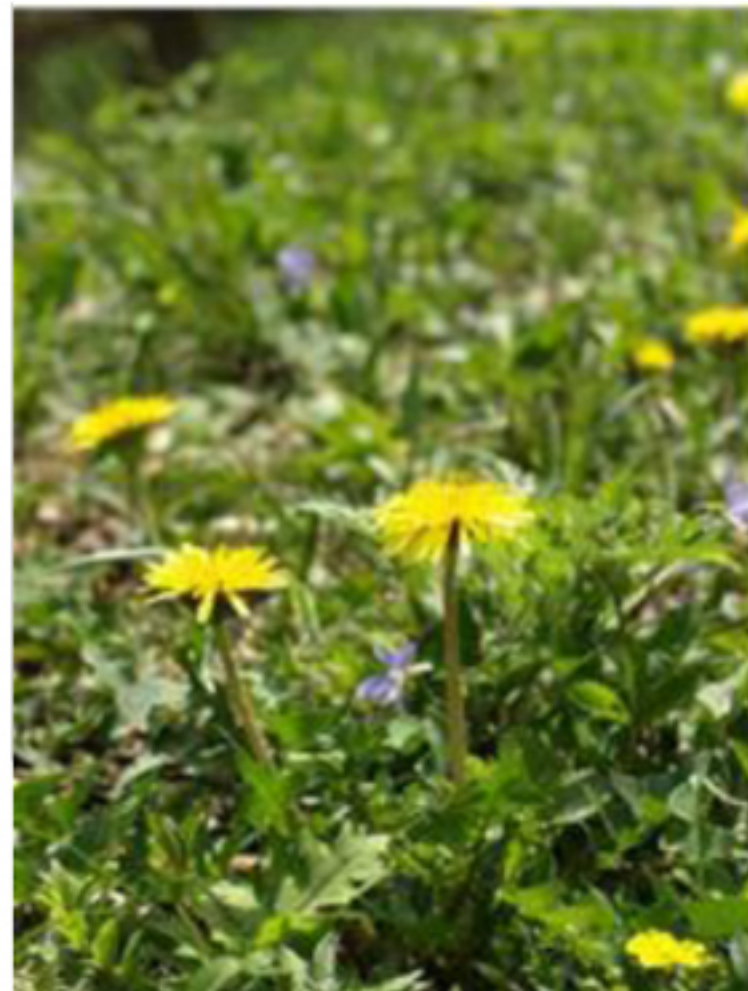
f. フデリンドウ *Gentiana zollingeri* (春)

雑木林にヤマブキの黄色い花が開くと春も本番。足元ではフデリンドウのまるで毛筆のようなつぼみが一つ、また一つと開いていきます。タヌキたちと比べてもわかるように、注意していないと踏んでしまいそうなほどのミニチュアサイズですが、目の覚めるような瑠璃色は存在感があります。絨毯のように群れ咲くその姿は秋のリンドウとはまた違った魅力がありますね。



g. タンポポ *Taraxacum* sp. (春)

春の原っぱと言ってまず思い浮かぶのがタンポポ。近年、西洋からやってきた外来のタンポポと日本古来のタンポポとが雑種を作り、タンポポのほとんどが雑種由来であることがわかっています。この絵に描かれたタンポポはおそらく日本のものだと思いますが、御神木を拝みに訪れた地元の人々を、あたたかも歓迎するように咲き誇っています。



h. ニリンソウ *Anemone flaccida* (春)

春の開花ラッシュが一段落する4月の半ば頃、里山のせせらぎではニリンソウが一斉に咲き出します。スプリングエフェメラルと呼ばれるこの仲間は、周りの草花が成長する前に葉を展開し、陽の光を独占します。そして開花・結実という一生のサイクルをわずか数週間のうちを終えて枯れ、地上から姿を消してしまいます。また次の春に向けて、地下での長い眠りに入るので



i. カキツバタ *Iris laevigata* (初夏)

今も昔も、人々の暮らしは“水”と常に隣り合わせです。当然、水辺に生える植物もごく身近に存在してきたわけですが、この絵のような光景はなかなか見られなくなりました。水草の浮かぶため池の多くは埋め立てられ、水生植物の宝庫であった小川は造成されて姿を消したり、河川改修で真っ直ぐに整備されたりしました。近年では、湿地の乾燥化や外来生物の侵入が水辺の植物をさらに絶滅の危機へと追いやっています。

j. アズマネザサ *Pleioblastus chino* (夏)

多摩丘陵の雑木林では最も身近なササの仲間。かつては篠竹と呼んでメカイ(カゴ)を編むなど、様々な用途に使われていました。やがて農家が衰退し、ササは使われなくなって野放しにされました。その後、数十年の間に多くの雑木林はササに覆われていきました。ササが茂ると、他の植物が生えることができなくなるため、公園管理もササとの闘いの日々です。



k. アケビ *Akebia quinata* (秋)

秋、枝などに巻きついて空高く伸びたツルの先端近くに、大きな果実を实らせませす。真ん中で縦にぱっくりと割れた姿が特徴的です。中に詰まったヨーグルト状の甘い胎座は、鳥や小動物が好んで食べます。皆さんの中にも、苦勞して収穫した経験をお持ちの方がいるでしょう。里山の豊かさを象徴する秋の味覚です。

l. ススキ *Miscanthus sinensis* (秋)

かつては茅葺き屋根などに使われ、生活に欠かせない植物でした。野焼きや刈り取りがほとんど行われなくなった現在では、その出番といえばお月見の時くらいになってしまいました。それでも、そよそよと風に揺れるススキの穂は秋の訪れを感じさせる風物詩であることに変わりありません。いつまでも日本の原風景として大事にしていきたいものです。



m. カキ *Diospyros kaki* (秋)

日本で最初の甘柿として知られる品種「禅寺丸柿」は川崎市麻生区が発祥とされています。この「禅寺丸柿」は江戸時代から戦後にかけて、都内の市場に盛んに出荷され、農家の貴重な収入源になっていたそうです。“柿生”という駅名が残っていることから、当時の様子を思い浮かべることができますね。柿を好む鳥や小動物は数多く、タヌキもよく食べます。木登り名人のハクビシンはするすると樹上の柿を取りに登っていきませんが、タヌキはほとんど木には登らず、落ちた柿や干し柿を狙ってやってきます。タヌキの公衆トイレとして知られる「ため糞場」からも柿の種がたくさん見つかっています。



n. コスモス *Cosmos bipinnatus* (秋)

キクやツツジに代表される古典園芸植物は、江戸時代以降、日本人の生活には欠かせない存在となりました。明治に入ると、さらに多くの植物が日本に渡来し、これらもまた身近なものとなっています。その一つがメキシコ原産のコスモスです。コスモスの花言葉は「真心」。きっと、この静かな農村で、人々の真心に包まれながら育てられてきたのではないのでしょうか。



0. マダケ *Phyllostachys bambusoides* (秋)

里山の暮らしの中で、竹ほど身近な存在はないでしょう。たけのこや竹細工、日本人は竹の持つあらゆる魅力を、余すことなく生活に生かしてきました。かぐや姫など数々の物語にも登場します。いつの時代も、竹と人々の生活は隣り合わせであったのです。竹の強い繁殖力は今や社会問題にまで発展していますが、原点を思い出しつつ、うまく共存していけたら良いものです。ちなみに、マダケの花は100年に一度しか咲かず、一斉に咲いて一斉に枯れるのだそうです。

